ひろこボケ日記（二）

村野　宏子

二〇一六（平成二十八）年　　九十歳

十二月九日

今日は　とても　良く　晴れて　います。
自分の　身体が　とても　老いてきた　のを　感じます。　なにしろ
一寸　仕事すると　すぐ　疲れてしまう　のです。　一日　ぼんやり
と過ごしている　のが　なにより　です。　私は　生まれてきて　九十
年　長い　旅路　でしたが　振返って見ると　波　その場　そのばの波
に　おし流されて　きたような　思い　です。
ハズキルーペ　○×▼〔電話番号〕めがねの上にかけ　大きくみえる
○×▼〔電話番号〕入浴の液。

二〇一七（平成二十九）年　　九十一歳

一月三十日

しばらく　日記　つけるのを　忘れていた。　九十才　主人　亡くし
てから　どうも　身体に　シンを　無くした　ようで　こまります。
今日は　お日様　に　久しぶりに　日光浴　しました。　お日様　あり
がたい　です。　なにか　身体に　力が　入りました。

一月三十一日

ネンネンコロリ　ピンピンコロリ。
ハイタッチ　人との　つながり　が　元気のもと　つながりが　ある。
上ちらし　助六　あなご　茶碗むし２
○×▼〔電話番号〕村野。

三月二十九日

この頃　少し　動いた　だけ　身体が　重い。　もう　一人ぐらしは
無理なのかな？　やはり　養老院　かんがえた　ほうが　良いのかな？
でも　私がいなくなったら　猫ちゃん　が　どうなるのか？　もし
誰も　餌を　やらなかったら　かあいそう。　ふろっぴい―風呂　やす
らぎのゆ。

三月三十一日

亡き夫　と　一夜　の　夢　の　はかなさよ。　ふと　目ざめ　夢　か
うつつ　か　まぼろし　か。
昨夜　ありありと　主人　の夢を　見た。
笑顔で　私を　見つめていた　力さん。　私のことを　心配して　あ
なたは　夢の中で　いたわって　くれた　のでしょうか？
朝　目ざめて　涙が　ひっきりなしに　出る。　一日　語ること　な
く　日が　くれる。

四月八日

一日　誰とも　話さなかった。　電話も　ならない。　でも　私は　さ
みしくない。　佛だん　の中の　貴男に向かって　話しているもの。　そ
れで　気がついた　私は　貴男が　亡くなってから　佛様の前で　あな
たのことばかり　思い　みんなの　亡くなった人　のこと　忘れてた。
バカだなあー　私は　明日からは　父母さん　守さん　其の他の　亡く
なった人に　おもい　をこえて　祈ろう。
明日は　克明　来るのかな？
うな重１　おかめうどん１　ＭＢＰ　骨のケア　骨密度　ヘルシオ
ブランパン。

四月十六日

今日　草むしり　終る。　庭が　とても　きれい　です。　シャガの
花　きれいに　咲きほこり　とても　きれい　です。　主人に　見せた
くて　植えた　シャガの花も　咲きました。　シャガの花　咲けど　夫
いない。

七月十七日

今日も　三十三度以上の　暑さ　です。　久し振りに　髪を染め　入浴も　しました。　きもち　良かった　です。

大久保さんからの　手紙も　ありました。　彼女は　淋しい　と　言っています。　まだ　御主人も　いるのに。　私は　一人ですよ。　でも　この生活を　だいじにして　健康に　気をつけて　はげみましょう。

二〇一八（平成三十）年　　九十二歳

一月八日

夜　美空ひばり　の歌　ききすぎ　眠りに　ついたのが　夜　十二時　夜のテレビは禁止だ　と　つくづく　思う。

今日は　大便出すのに　たいへん　でした。　最後に　亡き夫が　良くやっていた　牛乳　飲んだら　良く　出たので　良かった　です。

月日の　過ぐるは　夢の如し　と言うが　よく　いったもの　です。

今年になって　もう一週間　過ぎて　しまったのですもの……

一月二十二日

寒い。　今日は　雪が　降る　そうだ。　テレビの　放送で　うつっている。

寒さが　きびしくなる　とのこと　たくさん　きこむ。　この頃　テレビも　本よむのも　あまり　したくない。　只　眠っている　のが一番の　たのしみだ。

年老いたものよ。　今年は　満九十二才。　良く　こんなに　生きられたものよ。　十九才の時　横須賀の　海軍病院で　あと少しで　アメリカの　バクダンの　破へんで　私は　死ぬ　とこだった。

あの時　かばって　石井さんの上に　身体を　ふせたのが　命を　すくった。　あれから　七十数年　いろいろ　あったが　九十一才の　今日まで　生きられたのは　神佛　まわりの人たち　のおかげ　である。

只　感謝のみ……

夜　雪　温度　下る　ふとん　暖かい。

身心に　むち　うてど　ふるい　立たざる　老の身　悲しさ。　只　一人　いる　ことのみを　幸と　想う心の　わびしさよ。

二月二十七日

主人の　命日　です。　あれから　満二年　夢のように　過ぎていった。　邦子　会社の帰りに　いろいろ　買ってきて　くれて　佛様にそなえる。　安らかに　おねむり下さい。　足が悪く　何年も　あるけづ　貴男は　さぞ　辛かった　でしょうね。　若い時　あんなに　弱かったのに　九十三才まで　生きられたことは　幸いでしたね。　私にやさしく　してくれて　ほんとうに　ありがとう。　あのときも　このときも　貴男と　過ごしたのが　ほんとうに　たのしかった。　人生は夢を　見ている　ような　気がする。　十九才の時　アメリカ機のバクダン……

六月十七日

昨夜　つば　良く出る。　はな　が　少し　悪くなっている　のかもしれない。　九十二才　長い歳月　よく　生きぬいて来た　ものよ。　自分の　あしあと　を　ふりかえれば　一つ一つが　いとしく　又　おかしく　感じられる。

スケロク１　上チラシセット１　カイセン茶ワンムシ２　カガ　二人前１　なめらかプリン２　メロン　おいなり　のりまき　べんとう　ビスケット　つゆ　Ａ１３８　梅しそ　ねぎ塩　熟成重ねカツ相盛りべんとう　Ａ１８　エビフライ　血圧　酢―牛乳―ハチミツ　あさりのみそ汁。

二〇一九年　　九十三歳

（四月末まで平成三十一年、五月一日から令和元年）

四月十一日

克明　来る。　彼は　ビール一本　買ってきて　ひる御飯の時　良く食べ　飲む。　いろいろの　はなしで　時間は　またたくまに　過ぎてゆく。　午後三時すぎ　ふとん　干してあるので　雨降る　と　たいへん　と　急いで　帰ってゆく。

老の身は　この頃　夕方に　なると　とても　疲れ　手は　ふるえる。
蒲団の　中が　恋しく　すぐ　もぐる　このごろ。
公ちゃん　のぶちゃん　ちょうちゃん　花江ちゃん　あなたたちは
もう　この世に　いない。
淋しさは　つのる　ばかり。　老いてゆく　我が身は　つらい。　す
ぐ　疲れる。　手は　ふるえる。　ふとんが　恋しい。

五月二十日

今日　思いきって　八王子駅北口の　三菱銀行と　ゆうびん局へ　行
く。　タクシーの運転手さん　とても親切な人　はじめて　こんな　や
さしい人に　会った。
料金　納める。　しょ名する時　手がふるえて　字が　良く　書けな
い。　九十三才になると　いざという時　身体が　思うように　動かな
い　ので　ほんとうに　困る。　銀行でも　ヘマなこと　ばかり。　銀
行の女性が　親切に　いろいろ　してくれ　どうにか　すむ。
帰り　お茶とお菓子　食べ　タクシーで　帰る。　ヘトヘト　なり。

五月二十六日

月日の　過ぐる　のは　夢の　如し　とは　良く　いったもの　どん
どんと　過ぎてゆく。
庭の　梅の木等の　緑が　したたるように　美しい。　昨日は　真夏
のような　暑さ　でした。

八月三日

暑い。　何日か　毎日　三十五度以上の　暑さのため　レイボウつけ
一日　過す。　暑いので　思うように　身体が　うごかず　一日　食べ
る支度と　洗濯だけの　毎日　である。
お小水は　良く　出る。　紙おむつ　何枚も　つかう。　九十三才の
身体は　やはり　こたえる。
まあ　がんばって　この夏　のりきらなければ　と　心で　思う。
日記も　久し振りに　筆をとる　しまつ　である。

二〇二一（令和三）年　　九十五歳

四月二十三日夜

一日一日と　体力がなくなってゆくのが　自分で良くわかる。すぐふ
とんの仲にもぐりこみ　安心している　自分にあきれている　この頃で
ある。
満九十五歳　いろいろあったが　良くここまで生きてきたものよ。
♪ここはどこの細道じゃあー　天神様の　細道じゃ　一つ通してくだ
しゃんせ　御用のない人　通させぬ　この子の七つのお祝いに　おふだ
をおさめにまいります　ゆきは良い良い　帰りは　こわい　こわいなが
らも　通りゃんせ……
ワーと　二組に分かれていた子供達が　道をかける　片方の子供達を
追う。二組に　道でいつもこの歌をうたいながら　あそんでいた　なつ
かしい子供の時代。あの友もこの友も　もう　この世に　いない。歌と
いえば　思い出すのは　あいのみちの　ゲンちゃんのこと……
ゲンちゃんは　ゆたかな家の一人息子。歌とおどりが大好きな青年。
枕にきものをきせ（おぶって）　良く歌っていた。
♪泣くなー　よしよしねんねしな　山のカラスが泣いたとて　ないち
ゃあいけない　ねんねしな　なけばあー　カラスが又さわぐ
まくらの子供は　大きい時も　小さいときも　あった。見物人は　ワ
ーと　手をたたく。子供達はみんな　ゲンちゃんが　大好きだった。そ
のゲンちゃんが　召集によって　ふるさとをあとに　かんこの声に　お
くられて　駅まで　大勢の人におくられて　行った。そして　何ヵ月ご
に　白木の箱の人　になって　校庭に　帰ってきた。
私は悲しかった。　校長先生は　なにか　たたえたことを　言ってい
たが　たたえたことが　悲しくて　涙が　とまらなかった。戦争で　多
くの村の　青年達が　白木の箱の人　となって帰ってくるたびに　校長
先生は　ほめたたえたが　ただ　涙をたもとでぬぐうのに　一生懸命だ
った。
♪なくな　よしよし　ねんねしなーー　山のカラスがないたとてない
ちゃあーいけない　ねんねしな　なけばからすが　又さわぐ
♪ぼうや男だ　ねんねしな　親がないとて　なくものか　お月様さえ

ただ一人　わらっているから　ねんねしな。
げんちゃん　あの世で　この　歌って　みんなをよろこばせてるね。

四月二十四日

ネドコが　恋しい。　ふとんの中に入っているのが　この頃の　いちばんの　たのしみである。
ぼんやり　コタツにあたっている時は又　マリコのことを思っている。
マリ子は日赤の友。　別棟の夜きん　二人でしていた夜　おなかがすきすぎ　マリ子と　ナスドロボウにいった。サイキン室の　赤いデントウがちらちらする中　兵隊達の作っている　カボチャを一コとる。〝ミズノが　竹中白衣のスカートの中にいれろ　私はカボチャを下にいれ　看ご室にきて　カボチャ　にる。
二人で　この世にこんな美味しいものあるかよ　と　いいながら　作った兵隊達に　心の中で　わびながら　看ご室で　にて　食べた想い出なつかしい。
マリコ　なぜ　あなたは　頭から　二カイから　落ち　死んだの。
結婚しても　いつも　高尾のやどに　とまっていた　あなた。　天国で好きなように　くらしなさい。

四月二十八日

九十五回目のたんじょう日。　良く生きられたものよ。
ヨコスカのくうしゅう。つきさすようなアメリカの飛行機。　病舎につきさすようなアメリカの飛行機。　バクダンでメチャメチャになった病舎。　石井の上におおいかぶり　バクダンの落ちるのをふせいだ　そのため　私は足だけで　すんだ。　ながれる血。　兵士がかけつけ　止血し　たんかにのせ　はこんでくれた。　でんせんが　首にまきつくのも　ものともせず　はこんでくれた　ぼうくうごうえ　ありがとう。

（完）

付記（一）　二〇二一年のこの三日分の日記は、「よたよたにつき　おんぼろにつき　村野宏子」と表紙に書かれた大学ノートに記されていた。同じ人名などで表記が不統一の場合もそのまま転記した。

付記（二）　「ひろこボケ日記（一）」の方は、二〇二一年四月二十日発行の名田島お茶の間通信『せせらぎ』第八号に掲載され、その後、私家版『生きる　―廉子・宏子文集―』増補改訂第二版（二〇二一年十一月三日発行）に収録した。この文集の巻頭を飾った宏子の文章「友に代わりて青空を見る」は横須賀市史資料室通信③のＨＰで閲覧可能である。↓
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/documents/shishi-tsushin03.pdf

付記（三）　『生きる　―廉子・宏子文集―』増補改訂第二版は以下の図書館と史料館に寄贈し受領された。閲覧可能のはずである。
―日本赤十字看護大学図書館、国立国会図書館、しょうけい館（戦傷病者史料館）、あきる野市中央図書館、あきる野市五日市郷土館、横須賀市立図書館（市史資料室＝郷土資料室経由で納付された）、岐阜図書館、奈良県立図書館（戦争体験文庫）。
なお、岐阜図書館とあるのは、この文集のもう一人の著者井出廉子（宏子の父方の親戚）の文章が幕末の加納藩での事件を扱っているためである。

（二〇二二年一月十一日、「ひろこボケ日記」編者・村野克明、記）

イラスト©草野義彦